

---

# 戦没学徒・川田文子の記録と記憶は どのように継承されてきたか

— 「友の殉職」から「川田文子さんのこと」へ、そしてこれから —

村上 民

自由学園資料室 主任研究員

---

## 1 章 問題の所在

### 1 節 戦争体験の継承の展開と「ポスト体験時代」における継承・想起の「多様化」

2023年夏も全国戦没者追悼式出席者の世代交代、被爆者組織の解散・休止、戦争体験者の高齢化、非体験者による平和学習の実施の困難さ等が話題になった<sup>1)</sup>。だが戦争体験者の「反戦平和」の願いや主張に裏打ちされた証言活動、その意思を次の世代が受けとめ引き継ぐという「定型」のゆらぎは、体験者の高齢化や減少によってだけ起きているわけではない。何が「戦争体験」であり、何を受け継ぐのか、そもそもなぜ戦争体験は継承されなければならないのか、従来の共通理解自体がゆらいでいる。

『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』（蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編、みずき書林、2021年）は、戦争体験者（主に当時大人であった世代）がすでに90歳代以上の「ポスト体験の時代」における、戦争体験の継承・想起をめぐる新動向を幅広く取り上げ考察している。このなかには、従来の、いわゆる正統的な戦争体験の受けとめ方には必ずしも当てはまらない継承実践も含まれている。

編者の一人、蘭信三は序論において、「多様化」している継承実践の暫定的な分類にあたって、①世代的要素、②戦争体験を反戦平和として継承するかどうか、③戦争を肯定したり戦争体験から別の意味を読みとり新たに構築したりするかどうか、④国

内世論を重視するか国際世論を重視するか、といった複数の要素を組み合わせながら5つに分類し<sup>2)</sup>、同書で取り上げる継承実践のそれぞれの特徴を整理している。

蘭は、「戦争体験」とは体験者の高齢化や減少といった、時間の経過とともに「自然に」風化し忘却されるものではなく、様々な契機（個人的な理由、政治的、社会的な状況の変化）によってむしろ新たに想起され、継承されることに注意を払いながら、戦後日本社会の出発点としての「敗戦体験」、そして赤澤史朗による戦争責任論の展開（4段階）<sup>3)</sup>に準拠しつつ、特に第四期（1989年～1999年）以降の展開に着目する。冷戦体制の崩壊とそれまで抑圧されていた世界的な戦争責任の噴出、左派のイデオロギーの弱化とそれに代わる「人権」という普遍的視点からの戦後補償問題の提起、市民運動をめぐる国際的連帯の高まりを背景に、21世紀になってさらに加速するグローバル化、それと並行して生起する排外主義やナショナリズム衝突の事態にあって、戦争責任論の射程はよりグローバルに広がり、植民地責任論を含む形に展開してきていると指摘する。

同書で紹介されているのは、個人や団体による様々な継承実践／研究（第一部）だけでなく、国内15の代表的な平和博物館・資料館の歴史実践（第二部）である。特に平和博物館・資料館の、戦争体験の集合的な蓄積の「場」としての役割に着目し、これを戦争体験の継承実践の主体として位置付けた上で、それら博物館・資料館の成立経緯と展開、現

在の取り組みが横断的に紹介されている。こうした構成により、一見バラバラな目的意識と関心から行われているように見える個人・団体の取り組みや、揺るぎない方針で運営されているイメージが強固な平和博物館の取り組みもまた変化や苦悩を経ていること、「平和博物館」の定義には必ずしも当てはまらない博物館・資料館の背景などが、同時代の課題を担って模索する多様な取り組みとして、ある全体像をもって見えてくる。

筆者は、私学・自由学園（1921年創立）の組織アーカイブズの運営に関わっており、特にこの組織体や構成員による戦時期の活動や体験の記録・記憶の問題に関心を持つ。扱う範囲や規模はごく小さいものだが、〈かつての戦争〉に対する関心や意識の「多様化」は共通の課題である。戦前・戦中・戦後にわたって存続し、教育活動を行ってきた自由学園において、何が語られ、何が語られてこなかったのか（空白）、それらは戦後日本社会で語られてきた「戦争体験」とどのように関わってきたのか、そして今何が語られつつあるのかを、次節で整理する。

## 2 節 自由学園における戦争体験の継承・想起の展開と現状

「ポスト体験の時代」における戦争体験への新たな関心という状況は、筆者が関わる自由学園においても共通している。本稿でとりあげる「川田文子さんのこと」（自由学園高等科3年・山澤遥乃・山澤綾乃姉妹による「探求」学習<sup>4)</sup>、2021年度）もまた、「ポスト体験の時代」における継承実践のひとつとして位置づけられるだろう。

山澤姉妹の取り組みの検討に入る前に、ここでまず「自由学園と戦争」に関わる様々な体験（以下、自由学園の戦争体験）がどのような契機で継承・想起されてきたのかを概観する。

「自由学園の戦争体験」という場合、①組織体としての自由学園がどのように教育と経営を行ってきたのかについての創立者・羽仁もと子（1873-1957）、羽仁吉一（1880-1955）による語り、②戦時中に自由学園の教育を受けた生徒・卒業生による語りという二つに大別される。①と②がどのように

関連しながら「自由学園の戦争体験」を形づくり、また他の体験との交流によってその語りを変化させてきたのかを、以下の4つに分けて整理する。

### (1) マスター・ナラティブとしての「自由学園教育の一貫性」 1945年～1980年代

「自由学園の戦争体験」は、従来は何よりも①の創立者の言説が、関係者たちにとってのマスター・ナラティブとして長く機能してきた経緯がある。その言説とは、「学園建学の根本精神は戦前も戦時中も戦後も些かの変りはない」<sup>5)</sup>に代表される、自由学園の教育（理念および方法）が戦前・戦中・戦後を通して一貫して維持されてきたとする創立者の終戦直後の主張である。この発言の裏には、戦時下で自由教育を守るためギリギリの交渉に当たった羽仁夫妻が、敗戦後に突如として起った「自由」流行に対して抱いた強い憤りや、夫妻が明治後期の創業（出版・教育）以来一貫して主張してきた「自由と独立」への矜持があった<sup>6)</sup>。自由学園が戦時中に文部省や軍部からの圧迫にもかかわらず「自由」を冠した校名を守り通した事実とも相まって、この言説は戦後自由学園の道行きに大きな影響力をもった。このことは、戦後日本社会において「敗戦体験」に強烈に裏打ちされた反省、反戦平和の思想から戦争体験が語りだされてきたこと<sup>7)</sup>と比べると、出発の意識としてかなりの違いがある。

創立者没後の第2代学園長の時代（1950年代後半～1980年代半ば）においても、創立者の言説をいわば字義通りに踏襲する傾向が維持され、当時の実際の活動記録や証言の掘り起こし、総動員体制や戦時教育との具体的な関わりなど、戦時期自由学園を多面的に見直す動きは、学内では殆どみられなかった。こうした見直しが始まったのは2000年代以降である。

### (2) 生徒・卒業生たちの戦争体験の記録化 主に1970年代～2000年代

一方、②戦時期の自由学園に在学した生徒・卒業生たちによる、より具体的で多様な記録や証言は、様々な時期に様々な場所で語られ蓄積されてきた<sup>8)</sup>。

彼らは創立者・羽仁もと子、吉一に直に学び薫陶を受けた世代であり、当時まだ生徒の立場だったという限定はあるものの、羽仁夫妻の発言の背景に対する理解や共感があった。彼らの戦争体験は、①の創立者の言説の影響を強く受けてはいるが、各人の具体的で個別的な戦争体験を多く含んでおり、1990年代半ばから複数の証言集が自由学園出版局等から「正式に」刊行された。また、卒業生組織の機関誌等で戦時期の思い出が繰り返し語られ、特に女子卒業生では、1980年代後半から1990年代にかけて、卒業50年の人生の節目に具体的で多様な証言の記録化が行われた。

一方、自由学園と直接に関わらない場において、卒業生や関係者による多様な記憶の記録化もなされ<sup>9)</sup>、地域の市民運動との交流のなかで自由学園の戦争体験が語りだされる場合もあった。そのほか、卒業生の証言や資料（遺品）が、特定のテーマのもとに編集されたり学外の博物館等で保存活用されるなど、自由学園の文脈を離れて戦争体験が語られ、記録されるケースもみられた。

### (3) 戦争体験の問い直しと記録資料（アーカイブズ）の再整備 2000年代～

2000年前後から、学内、とりわけ大学部学生から自由学園の戦時期を問い直す動きがでてきた<sup>10)</sup>。この背景のひとつとして、主に女性史研究から「銃後」の戦争責任、婦人運動指導者としての羽仁もと子の姿勢を問う議論<sup>11)</sup>が既に提示され、それらを学んでいたことも挙げられる。

自分たちが属する学校の歴史的経緯を冷静に振り返り、現在の課題や今後進むべき方向性を考えたいとの問題意識から、学生たちが学園所蔵の記録資料（主に当時作成された生徒の日誌類）の調査や、卒業生・関係者へのインタビューを精力的に行った。この調査には、創立者の言説や行動を批判的に捉える視点が含まれていたこともあり、従来の創立者の言説の枠組みで「自由学園の戦争体験」を受け取ってきた関係者（その多くは戦中に幼少か戦後世代）との間に緊張関係も生じたが、一方で新たな対話も生まれた<sup>12)</sup>。2000年代以降、主に大学部学生たち

による、戦争体験者およびその記憶を共有する世代との緊張と対話の中で、自校の歴史、特に戦時中の自由学園の実相に迫る意欲的な研究が取り組まれた。

2000年代以降はまた、記録資料・アーカイブズ自体の調査・再整備も進展した。2002年に自由学園資料室が発足、組織アーカイブズの整備を本格化させてきた<sup>13)</sup>。特にこの20年は戦争体験者による証言の最後の時期でもあった。資料室では学内でこれまで取り上げてこなかった創立者夫妻の長女・羽仁説子、羽仁五郎（説子の夫）の資料調査等にも着手、従来は自身の戦争体験を学内で積極的に語ってこなかった卒業生たちにアプローチし、インタビューや資料収集を行った。そうしたなかで、創立者を含む関係者の「戦争体験」の言説を「資料」として相対化しつつ、多様な証言を再評価し位置づける一連の調査研究が蓄積された<sup>14)</sup>。

### (4) 戦争体験者と接点を持たない世代による戦争体験の継承の試み 2020年代～

ここ数年、「コロナ禍」も影響して高齢の卒業生との交流は極端に減り、「自由学園の戦争体験」を自身の体験として語れる世代との接点は殆どなくなっている。そうしたなかで、種々の記録資料（一次資料）が、「自由学園の戦争体験」にふれる数少ない機会として注目されつつある<sup>15)</sup>。

今回取り上げる「川田文子さんのこと」（2021年度）は、こうした状況のなかで取り組まれた。先の蘭信三の分類（注3）によれば、「(c) 親や親族等から直接的に戦争体験を継承してこなかった〔引用者補足：親の戦争体験に影響を受けて育った戦後世代よりも〕もっと若い世代が担う従来型の継承実践」に当てはまる。さらに、戦争体験者との直接の接点・交流なしに行う取り組みという意味で、「ポスト体験の時代」の最も先端の取り組み、つまりほぼ「体験者不在の時代」の取り組みという性格もっている。

### 3節 「川田文子さんのこと」の取り組み 本稿の課題

2022年3月、自由学園女子部高等科3年生の山澤遥乃、山澤綾乃姉妹が、1944年12月3日の中

島飛行機武蔵製作所への空襲で死亡した動員学徒「川田文子」（自由学園女子部23回生）について、様々な記録を用いて「探求」を行い、その成果を「川田文子さんのこと」として学内で展示発表した。その成果は冊子『川田文子さんのこと』（67頁）として、2022年10月に自由学園出版局から刊行された。目次構成は以下の通りである。



写真1 『川田文子さんのこと』表紙

- ・この本を読んで下さる方へ
  - ・[Part1] 山澤遥乃編 川田文子さんのこと（漫画）／「川田文子さんのこと」について
  - ・[Part2] 山澤綾乃編 川田文子さんの生活帳（ノート）／川田文子さんについて（ポスター）
- ※冊子の帯裏面（A3サイズを三つ折り）に印字
- ・おわりに
  - ・参考文献

山澤姉妹が探求活動において参考にした記録は主に以下【A】～【D】の4点である。（ ）内の番号は、前節で紹介した「自由学園の戦争体験」継承・想起（1～4）のどれに当てはまるかを示しているが、すべてが（2）生徒・卒業生たちによる戦争体験の記録化であることが分かる。

【資料A】自由学園女子部卒業生会編『自由学園の歴史Ⅱ 女子部の記録1934-1958』、婦人之友社、1991年。（2）

【資料B】自由学園女子部二十三回生編・発行『自由学園二十三回生の記録 卒業五十年に際して』、1995年。（2）

【資料C】武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会編・発行『証言・学徒勤労働員 中島飛行機武蔵製作所に動員された学徒の記録』、2003年。（2）

【資料D】立命館大学国際平和ミュージアム編・発行『ぼくたちわたしたちの生きた証「若人の広場」旧蔵戦没動員学徒遺品展図録』、2005年。（2）および（3）

つまり、「川田文子さんのこと」は、主に90年代以降に作成された記録の読解をもとに行われている。「川田文子さんのこと」を戦争体験の継承実践として評価するにあたっては、山澤姉妹の作品だけを単体でみるのではなく、その背後にある様々な記録の作成経緯や継承の展開をできるだけ掘り起こし、川田文子関連の記録資料（アーカイブズ）の全体像の把握と共に「川田文子さんのこと」を考察することが有効である。川田文子の死について、最初は何が語られ、何が語られなかったのか、またどのような契機で新たな語り、語り直しが起きたのか、その展開は一直線でなくところどころに「空白」もあることに注意を払いながら、暫定的に全体像を把握しようとするのが、今後、戦争体験者の不在が確実にになり、残された記録資料の「位置づけ」がますます重要な手がかりになってくる時代に向けて、必要な作業になると考えるからだ。

以上のような問題意識にもとづいて、本稿では、まず戦時下自由学園における「勤労」の意味づけと勤労働員との関係、女子労働力確保と動員状況をおさえ、川田文子が経験し動員生活の概要を把握する（2章）。次に川田文子の死をめぐる記憶の記録化と継承の過程を整理し考察することを通して「川田文子の死」の継承の展開を把握する（3章）。その上で、「川田文子さんのこと」における記録読解の特徴と

意義、そして今後の課題を考察する(4章)。これらを通して、「ポスト体験時代」、とりわけ戦争体験者と直接の接点を持ち得ない世代による戦争体験の継承・想起の課題を提示する。

## 2章 自由学園における学徒勤労働員 (主に女子部)

### 1節 戦時下自由学園における「勤労」の意味づけ

#### 1) 戦時「生活即教育」と「勤労奉仕」「勤労働員」との連続性

自由学園は羽仁もと子、羽仁吉一によって、最初は女子中等教育(各種学校)として東京・池袋の地にたてられた。キリスト教を土台とする自由教育を目指し、徐々に教育の範囲を初等教育、男子中等教育、幼児教育と広げ、1930年代に東京府北多摩郡久留米村(現・東久留米市)に移転した。

自由学園の教育理念として、「自分の生(いのち)」の主体性を重んじ、その「経営」を人任せでなく自分で行うこと、さらにそれを協働で行い、学校生活を通じて社会形成を学ぶことが目指された。その「生活」重視の教育は、1920年代後半以降、狭義の学校教育の枠を越えて「学校から社会へ」と広がった<sup>16)</sup>。

「生活」「自治」の観点から「勤労」を重んじていた自由学園では、戦時の「勤労奉仕」「勤労働員」についても、「生活即教育」の理念・方法・組織と連続的に主体的に実施された側面がある。たとえば、男子部(中等教育)の勤労奉仕・勤労働員は男子部教育の特色である「工作」(工業、続いて農業)と連続的に「教育的に」実施され、女子部の勤労奉仕・勤労働員も、女子部の生活教育や農村セツルメント実践とも連続的に行われた<sup>17)</sup>。

#### 2) 自由学園存続問題と「勤労」の関わり 戦時の有用性の強調

前述のように、自由学園1930年代半ばまでに初等教育と女子・男子の中等教育(7年制)を有していたが、女子部男子部はともに各種学校(高等女学

校令、中学校令によらないその他の学校)であった<sup>18)</sup>。

戦局の長期化・悪化とともに学校教育の統制がすみ、1943年1月に中等学校令が公布、中等教育の一元化が図られた。これに伴い、各種学校の「整理」(廃止)方針が示された(同年10月閣議決定「教育ニ関スル戦時非常措置方策」)。なお、「時局下特に不急なるもの」を閉鎖するとの当方針は、戦時の労働力不足への対応策として、特に女子の労働力確保との関連が指摘されている<sup>19)</sup>。

この「整理方針」に対応するため、自由学園は学校存続にむけて1943年夏から各所への働きかけを行い、並行して学則変更申請や専検指定申請にむけて動いた<sup>20)</sup>。

この危機への対応のなかで、自由学園は「不要不急の各種学校」ではない「戦時の有用性」を示す必要に迫られていた。この時期、男子部女子部生徒が学外で勤労し始め(1942年度～)、特に女子生徒の農村での勤労奉仕(1942年度～)や女子部卒業生による「女子勤労挺身隊」の指導者訓練(1943年秋)などが積極的に行われた<sup>21)</sup>。

#### 3) 「女子職場」の整備と自由学園女子部卒業生・生徒の役割

戦局の長期化による労働力不足に伴って、女子の労働力確保が叫ばれるようになる。1943年9月の次官会議「女子勤労働員ノ促進ニ関スル件」で、14歳以上の未婚女性を対象とした「女子勤労挺身隊」の自主的結成がもとめられ、各軍需工場でも女子を受け入れる準備が開始された。自由学園はこの動きにいち早く対応して、女子卒業生や上級学年の女子生徒に対して、工場生産の労働力としてはもちろん、「女子職場」整備に生活指導の面で役割を果たすための訓練を開始している<sup>22)</sup>。こうした動きは前述の学校存続問題への対応時期と並行していた。

1944年になってから戦局はさらに切迫、「決戦非常措置要綱」(1944年2月25日閣議決定)により中等学校程度以上の学徒は通年動員の態勢となった。自由学園でも同年4月から女子部・男子部高等科最上級生(高等科3年生)が近隣の軍需工場に動

員された。女子の場合、4月から高等科3年80名のうち半数が3つに分かれ、中島飛行機武蔵製作所、中島航空金属田無製造所、大日本兵器湘南工場工場の各工場に動員された（8月から残りの37名が各工場へ、1945年3月まで）。

これら3つの工場、特に中島飛行機武蔵製作所と中島航空金属田無製造所で、自由学園生徒は主に女子寮での生活指導の役割を期待されたことが、生徒側の当時の動員日誌や後年の回想から確認できる。衣食住を含め自治的な学校や寮の運営を学びとして行う「生活即教育」が工場側に評価されたといえる<sup>23)</sup>。前述のように、「女子挺身隊」が組織される初期（1943年秋～）から自由学園女子卒業生らがいち早く「女子職場」を準備する役割を期待されたが<sup>24)</sup>、その後継として、動員学徒の高等科3年生の働きがもとめられたのだった。

#### 4) 中島飛行機武蔵製作所での学徒勤労働員

中島知久平が1917年に創設した中島飛行機会社は、三菱重工業とならぶ戦前日本の航空機産業のトップメーカーであった。中島飛行機が武蔵野地域に進出したのは1920年代で、1930年代から規模拡大し、その中心であった中島飛行機武蔵製作所（現・東京都武蔵野市）は、軍用機エンジンの生産では日本の全生産量の約3割を占めていた。田無町、武蔵野町、三鷹町を結ぶ武蔵野地域は、中島飛行機会社が配置した工場群・関連施設を中心に、その他近隣の軍需会社や工場等も含めて一大軍需工場地帯を形成していた<sup>25)</sup>。

牛田守彦は武蔵製作所への勤労学徒動員の経過や各学校の状況をまとめている<sup>26)</sup>。それによれば、動員学校数は中等学校22校、各種学校・専門学校・大学等16校（各種学校・自由学園を含む）、このうち女子の学校は13校である<sup>27)</sup>。この13校のうち、自由学園は共立女子職業学校（4月8日入所）に次いで早期に工場に入所しており、そのタイミングで「女子職場」の整備の役割も与えられたようだ。『証言・学徒勤労働員—中島飛行機武蔵製作所に動員された学徒の記録—』に収録されている証言や資料を見る限り、武蔵製作所で「女子職場」に関わっ

ていた女子の学校は自由学園のみである<sup>28)</sup>。

さて、学徒動員受入の最初期（1944年4月17日）に入所した自由学園生徒20名は、初日に同工場勤労部長（自由学園生徒の保護者）から、自由学園生徒には他校等の女子挺身隊に対する「指導的な役割を期待する」との話があったという<sup>29)</sup>。最初の一か月余は「会社の状況も方針も目まぐるしく変わる中で」準備をすすめ、5月から半数は直接女子職場で機械や仕上げの仕事を担当、他の半数は勤労課、厚生課、教育課に分かれ、それぞれ学徒のことで、女子寮のこと、国卒隊（国民学校卒業生からなる年少の女子挺身隊）の生活支援を担当することになった。そのほか、数名ずつに分かれて女子寮各棟に入り、寮での生活指導も期待された。5月末からは女子職場も三交代制となったため、一日の予定を立てることはもちろん、健康管理、衣食住の工夫、コーラス、お誕生日会など、「殺風景な寮のくらしを何とか潤いのある、和やかなものにと努め」たという<sup>30)</sup>。しかし、他校生徒と同じ動員学徒の立場で「指導的な役割」を担うことには難しさもあり、また会社の方針も必ずしも一貫していなかったことがうかがえる。「[引用者補足：工場の]現場以外では、我々の仕事そのものがはっきり決められた形のあるものではなかったし、全く未知の世界で試行錯誤を繰り返したこともあったが、そんな仕事でも学園の生徒として、私心を捨てて当たろうと、本当に夢中で過ごした」という<sup>31)</sup>。

こうして自由学園生徒は、動員先の工場で一学徒として労働するだけでなく、工場内に女子の労働環境や生活環境を整備するという役割を期待されるなかで、普段の学びを生かし精一杯にその役割を果たそうとしていたことが分かる。川田文子もそうした仕事に取り組んだ一人であった。

### 3章 川田文子の死はどのように語られてきたのか

#### 1節 川田文子について 動員先での生活と空襲による死

『川田文子さんのこと』の主人公である川田文子は、1925年、川田久長、良子の二女として東京・牛込に生れた。父親は大日本印刷に勤めており、自由学園創立者の羽仁もと子・吉一夫妻が経営する婦人之友社は設立当初から秀英舎（のちの大日本印刷）と取引があったため、親しい関係があったという<sup>32)</sup>。

川田文子は1938年4月に自由学園女子部普通科に入学、当時女子部は7年制（普通科4年、高等科3年）であった。1944年4月、中島飛行機武蔵製作所に動員された20名のうちの一人として工場寮に入寮した<sup>33)</sup>。

前述のように、川田文子ら自由学園高等科3年生たちは、工場内で女子職場整備に関わる役割を期

待された。川田も教育課や厚生課に配属され、女子寮での生活指導や支援、女子挺身隊の少女たちのお世話も担当したようだ。どのような内容の勤務や寮生活をしてきたのかについては、本人が記していた「生活帳」（資料番号：29982）と「生活記録」（資料番号：29982）が残され、現在、立命館大学国際平和ミュージアムに所蔵されている（川田文子遺品16点の来歴については後述する）。

川田文子の「生活帳」（ノート形式）は主に3つの部分からなる。①6月22日から12月13日までの一日ずつの記入欄が作られている部分<sup>34)</sup>、②動員生活を時系列で整理した年表風の記述、③各種メモである<sup>35)</sup>。

生活帳・生活記録にはそれぞれの記帳の用途があったようだが、両方の資料に共通な記述として、②の動員中の生活を時系列でまとめた年表風のものがある。入寮した1944年4月17日から始まって、生活帳には10月1日まで、生活記録には11月30日まで記されている。特に生活帳では、配属部署や

表1 川田文子「生活表」「生活記録」の年表記述にみる勤労働員生活（1944.4.17-11.30）

時期区分（生活帳による）	日付	生活帳 29982 の年表パートによる記述 計4頁（縦長ノート見開き、時期区分あり）※旧字以外はそのまま入力	生活記録 29983 による記述（4.17-11.30）計6頁（横長ノート見開き）※図録記載の書き起こしはこれによる
錬成期間及び職場時代	0417	入寮	同左
教育課	0418	第三会議室に於て入所式 教育課に入る	同左 教育課所属になる
	0419	夜 挺身隊の歓迎会	同左（第十食堂にて）
	0420	今日から第一班の中に入って生活	同左
	0421	今日から機械実習	初めての機械実習
	0424	電休日 地方より来た人を東京見物につれて行く	同左 公休 案内
	0430	送籍式	第二青校に於て送籍式
第七機械職場	0501	今日から一時半～九時の作業	一時半～九時迄の作業
寮時代 厚生課	0508	今日から寮のことをする 田無の寮に見学	同左
	0517	寮の引越	同左
	0520	今日から生活係出る	初めて生活係出る
	0524	内藤課長の時事問題のお話	同左
	0526	今日から三部制	同左
	0603	奥田さん〔藤根さん〕と寮のことをする	同左
生活指導班時代 厚生課	0618	今日から寮長制度 棚森さん 生活指導班生る	寮長制度 棚橋 高野 笠原 生活指導班生る
職場時代 第七機械職場	0707	今日から現場 高林班	同左 普通旋盤
	0714	中島第一青校に於てラヂオ放送	同左 工研生 工場歌 ラバウル航空隊
	0726	7/26より7/30 腸カタルの為欠勤	同左
	0801	8/1より十一棟寮長補佐になる。現場ぬける	同左（現場抜けるの記述なし）
	0805	二十名新しく入所する	同左
寮係（福利係、生活補導班）時代 厚生課	0814	新しい二十名送籍される	同左
		古い人の働き場も大体きまる	記述なし
	0821	今日から女子寮生活補導班として女子寮中央事務所にて仕事を	女子寮生活補導班となる 女子寮中央事務所にて仕事を

	0825	午後都築さんとお話する		午後都築さんと色々お話する
	0826	斉藤さん来る 学徒班のこと問題になる		同左
	0827	防空壕を掘り始める		大計画防空壕掘り始める
	0829	公休学校へ		同左
	0830	夜山室先生いらっしやる いろいろと伺ふ		記述なし
	0831	食券、証票のこと		記述なし
	0901	いろいろの相談をした。夜坂本さんいらっしやる		記述なし
	0906	部長、寮監とお話。		部長寮監とお話なさる
	0912	公休		同左 9/12-9/13 風邪の為休む
	0914	夕方帰寮		
	0915	一日中央事務所		
	0916	9/16-9/20 病欠欠勤		9/13-9/16 病欠欠勤
			0920	学徒大会
	0921	今日より教育課工研班に入り女子工研生の係員の一人としてお仕事をす		今日より教育課工研班に入る
	0924	物品の要求午前中歩く 午後マーク図案	0923	いろいろの物品要求の為一日中歩く
	0926	寮開き		午後六時より寮開き
	0927	開所式 [第一回女子特別講習会のことカ]		同左 所長 部長来席
	0928	初めてのお料理 時間におくれる (夜番)		最初の料理時間におくれる
	0929	午前返済に 午後初めて実習に出る		初めて実習に出る
	1001	中村さんのお話	1003	同左
		部長来訪	1004	同左
		野田大佐来訪	1005	同左
		課長来訪	1006	同左
			1007	今日より座学 暴風警報あり
			1008	大詔奉さい日 道場にて奉読式
			1009	夜勤最後の日
			1010	懇親会 夜六時半より工研生九人来席
			1011	今日より昼勤
			1012	姉の三回忌の為欠勤す
			1014	午後より石渡係長太田へ出張
			1015	久しぶりで女子寮へ行きいろいろ話した
			1017	二週間のしめくくり
			1019	防空強化日 寮に於て勉強 (非常食)
			1022	学徒寮にまとまることになる
			1023	太田へ出発
			1024	公休、学校へ 四時半より夕食作る (防空演習)
			1025	終了式 座談会 晩餐会
			1027	まとめ 生活相談 (先生いらっしやる)
			1101	空襲警報発令
			1105	空襲警報発令
			1107	公休 空襲警報発令
			1108	風邪の為欠勤
			1109	風邪の為欠勤 校葬
			1110	風邪の為欠勤
			1115	第二回女子特別技術講習会開始式
			1121	公休
			1124	東京初空襲 (武蔵製作所)
			1127	再び空襲
			1128	講習会一時休止
			1129	今日より学校の寮へ
			1130	夜空襲

与えられた仕事によって自分なりに「時期区分」しており、色鉛筆で色分けもされている。自分の仕事、生活を冷静に見つめる目を感じられる。

「生活帳」②部分と「生活記録」の年表記述を表1として一覧にまとめた。

興味深いことに、川田文子の「生活帳」には、おそらく川田が指導を担当していた女子挺身隊の少女たちに対して「生活帳」の提案（指導）をしたことが記されている<sup>36)</sup>。「生活帳」の③の記載によれば、「早く一人前の工具になる為に記録をよくしたいと云って生活帳を作ることになり」と、洗濯予定や生活目標、勤務予定・実際、日記などを記す「生活帳」の提案をしたことが分かる。①によれば、6月23日から30日にかけて「生活帳」の内容考案と作成（印刷）、配布を行っている。②によれば、この時期は「生活指導班時代 厚生課」にあたる。この時期の川田文子の活動のひとつに「生活帳」の考案と提案があったことがわかる。

さて、9月21日、「今日より教育課工研班に入り女子工研生の係員の一人としてお仕事をするとあり、川田文子の仕事は次の段階に入ったようだ。時期区分するとすれば「教育課工研班時代」となるだろう。工研生とは、「工作法研究生」の略称で、「航空機発動機製作に関する基礎的技術の習得並中堅技術者の素養を会得せしむる目的」で、学力考査や人物判定に合格した者に特別訓練を実施するものだった<sup>37)</sup>。同級生で川田文子と同じ部署に配属されていた藤岡千鶴子によれば、工研係という職場には、一年上級の卒業生2名（女子部22回生矢野、笠原）と、川田、藤岡が配属されていた<sup>38)</sup>。教育課工研班の勤務場所は武蔵第一青年学校（現在の武蔵野市第四中学校の場所）であった<sup>39)</sup>。

ここから先は、複数の同級生の回想によって川田文子の足取りをたどってみる。9月26日から「第一回女子特別技術講習会」が東伏見の駅に近い山の傍の練成寮ではじまり、川田文子、藤岡千鶴子（後年に川田文子について回想を発表）、望月愛子（川田死亡直後および後年に回想発表）、松村久子がこれに参加した。つづいて11月15日には第二回女子特別技術講習会開始式が行われ、自由学園から棚

橋、小島、宍戸、羽田澄子（後年に川田文子について回想発表、映画製作に取り組む）の4名が参加、「他の女学校の挺身隊数十人と一緒だった。ここでも学園の私たちは生活指導の面で期待されていた」。第二回講習会参加者の記念写真の前列に川田文子も写っているので、この講習会に関わる仕事をしていただろう<sup>40)</sup>。

11月24日正午過ぎ、中島飛行機武蔵製作所への「初空襲」があった。前述のように軍用機エンジンで国内の主要生産拠点であった武蔵製作所は、マリアナ諸島からのアメリカ軍B29の最初の目標となった<sup>41)</sup>。工場内で57人が死亡、事態を重くみた羽仁吉一は、武蔵製作所に動員されていた自由学園生徒全員を工場内の寮から引き上げさせ、11月29日から自由学園内の寮（久留米村）から工場に通う態勢に変更させた。川田文子の「生活記録」の年表風のスペースには、11月30日までの出来事（空襲警戒警報、空襲、自身の体調、工研班での仕事など）が短い言葉で書き込まれている。

12月3日、武蔵製作所は2回目の空襲に遭う。この日工場の事務室に日勤で働いていた川田文子と藤岡千鶴子は、昼食を済ませた直後、空襲警戒警報を受けて所定の防空壕（現在の武蔵野市陸上競技場の土手下）に避難しようとした。手洗いに寄った藤岡より一足先に防空壕に入った川田であったが、至近弾で壕がくずれ、中にいた10名余とともに死亡した。この日、工場内で60名が死亡しているが、このうち少なくとも16名は勤労働員学徒であった。そのほとんどが防空壕内での犠牲者だった<sup>42)</sup>。

B29が去り警報が解除されてから、工研生の防空壕の中にいた川田文子たちが掘りだされた。矢野三枝子、藤岡千鶴子は、川田文子が「防空頭巾の中のお顔も着ていらっしやっただ洋服も泥だらけになって横たえられ」人工呼吸を施されているのをただただ見つめ、泣いていたという。そのときの様子について、1980年代後半に直江（旧姓藤岡）千鶴子が『自由学園二十三回生の記録』【資料B】で証言を発表しており（後述）、山澤遥乃がこの文章を漫画の骨子としている重要な記述なので、紹介したい。

大沢先生がすぐかけつけてこれ、三人で水をとりかえとりかえ頭巾を外してお顔の泥をおとした。耳にも鼻にも泥が一ぱいつまり、耳からは血が流れていたことを今も生々しく思い出す。でもきれいにぬぐわれた川田さんのお顔はいつものように美しく静かであった。十二月のことで早くくればじめた道場に山室善子先生もかけつけられ、たまたまその日持ち合わせていらした(ママ)真新しい口紅をあけて、川田さんの唇にそっと紅をおひきになった。十九才で無残な最期をされた川田さんへの何よりのやさしいお心ずかい(ママ)であったと思う。お顔が本当に生き生きとして、さらに美しくなられたようであった。<sup>43)</sup>

このように、川田文子は自由学園在学最後の一年を同級生らと共に動員先の中島飛行機武蔵製作所で過ごし、1944年12月3日、米軍による同所への2回目の爆撃に遭い、避難先の防空壕内で死亡した。19歳であった。川田文子の遺品が遺族の手に残され、その死は同じ部署に所属していた同級生らに見届けられ、記憶されたのであった。

## 2節 1944年12月「戦死」「殉職」としての受容

中島飛行機武製作所内の遺体安置所に移された川田文子のご遺体を、羽仁吉一は自由学園に迎えたいと手配に奔走したが、それはかなわなかった。同級生たちは当時、武蔵製作所を含む3カ所の軍需工場に動員されていたが、深夜勤務の前後にかけつけ、ご遺体に対面している。12月5日の出棺時、羽仁吉一は川田文子の棺を校旗「自由の旗」でおおい、「戦死です、軍旗です」と述べたと卒業生は記憶する<sup>44)</sup>。

12月9日に社葬が行われ<sup>45)</sup>、16日に自由学園で学校葬が行われた。この頃、同級生から遺族に送られた書簡、葬儀の弔辞等が残っている(表2参照)<sup>46)</sup>。

1944年11月、12月は、自由学園生徒・卒業生の訃報が相次いだ。11月4日には動員先の日立航空機立川工場への通勤中のバス事故で女子部高等科

2年3名(赤木二葉、高松和子、古川寿美)が死亡、9名が負傷した。それから1カ月たらずの12月3日に川田文子が武蔵製作所への空襲で死亡したのである。さらに、男子部卒業生1名(芦澤久直)の戦死も伝えられていた。『婦人之友』1944年12月号には、主筆の羽仁もと子が巻頭言の末尾に彼らの氏名を記し、同級生・望月愛子が母親への手紙の体裁で川田文子の死「友の殉職」を報告した。羽仁吉一は連載の「雑司ヶ谷短信」で、「教育報国」と題して生徒たちの死を記している。「この一と月ほどの間に起った悲痛なる出来事は、我々の心を重くする。同志、同学、同行の友と教へ子たちを呼びなして来たが、今や時局の危急に当って、寧ろ戦友といふより適切であることを痛感する。我々の行学一体の旗印は、戦友の血によって彩られてゐるといっても言ひ過ぎではない」とする。そのあとには勝利への祈願と教育への思いが交錯する文章が続き、矛盾を露呈した表現となっている<sup>47)</sup>。当時の記述に限界があったとはいえ、当時32頁の雑誌『婦人之友』の三分の一が彼らの死に関連する記述に割かれている。

この頃、川田文子の空襲による死は、吉一によって「戦死」、「戦死も同じ」(文子父の挨拶)に表れているように、「戦死」と同等に引き上げる「殉職」として語られた。

ところで、同級生・直江千鶴子(川田文子と空襲直前まで昼食を共にしていた)は、1990年代に行った証言で「殉職」の語を使わなかったことに注意しておきたい。直江は証言を12月3日当日の出来事に絞る。「御遺骸が粗末な即製の木の箱に入れられ、深夜、東伏見の慰霊祭場に運ぶためのトラックにどンドン積み込まれようとした・・・その夜、工場のあちこちで焼けのこりの火が燃え、電線や木の枝に爆風でふきとんだ方々の、身体の一部や衣服がちぎれて引っかかっていた。それもまとめてトラックにつままれていったのを思い出す。(後略)」<sup>48)</sup>と語り、一方、羽仁吉一が棺を校旗で包んだ「儀式」については一切ふれなかった。ちなみに、山澤遥乃はこの直江の証言の筋を保持して漫画を描き切っている<sup>49)</sup>。

### 3節 終戦直後、1950年代とその後——言語化されず、継承されなかった追悼の意思

終戦後まもない1945年11月12日午後、自由学園女子部講堂で女子部生徒・卒業生の追悼会が小規模に行われた。動員中のバス事故で亡くなった赤木二葉、高松和子、古川寿美、武蔵製作所の空襲に遭った川田文子、そして1945年3月卒業後に広島で被爆死した吉岡豊香を偲んで、遺族を迎え、羽仁夫妻、新卒業生（川田文子の同級生）、高等科3年生計90名の集まりであった<sup>50</sup>。生徒の日番報告書によれば、「本当に思い深い一日」、「秋晴れのよいお天気で、本当に御恵の中に包まれた様な気がしました」、羽仁吉一が礼拝の司会を、羽仁もと子がかつて自分の娘を失ったことと自身のキリスト教信仰について語った。川田文子の父が遺族代表で挨拶、その日撮影された23回生16名のスナップ写真が残っている<sup>51</sup>。戦後しばらくの間、23回生は文子の命日に川田家への訪問を続けていた<sup>52</sup>。

1952年5月2日、サンフランシスコ条約発効後間もない時期に「全国戦没者追悼式」（第一回）が新宿御苑で営まれた。この日に合わせて自由学園でも朝の礼拝で生徒・卒業生の戦没者（行方不明者を含む男子部卒業生11名、学徒勤労動員中に死亡した女子部生徒4名）を追悼する時がもたれた。当時の『学園新聞』は彼らの死を「尊い犠牲」と捉えて見出し等で報じ、羽仁吉一の講話について「ミスタ羽仁は、数少ない卒業生の中からこれだけの犠牲者を出したことは、実に痛ましいことである。戦争の是非は暫くおき、かれらは学園精神をその戦場生活に生かし、死に至るまでその義務を忠実に実行したことは、永くわれわれを励ましてくれるとあって、一人々々についての感想を語られた」と報告している。同級生たちも亡き友への思い出を寄せており、川田文子については望月愛子が思い出を語っている<sup>53</sup>。

3年後の1955年5月、男子部創立二十年記念式典のなかで男子部卒業生戦没者10名<sup>54</sup>の追悼会が、遺族を招いて行われた。男子部・男子最高学部（大学部）の生徒学生、卒業生85名（当時、男子部卒業生総数は193名）が集まった。羽仁吉一が

礼拝の司式と講話を行い、自由学園男子部の創立（1935年）経緯と二十年の歩みを振り返りつつ、男子部卒業生の死を悼んだ。『学園新聞』はその講話について「十人の亡き友の短い生涯もこの長い歴史の中に尊くかけがえのない礎石の一つ一つなのである。とミスタ羽仁〔引用者補足：羽仁吉一〕はあまり長く話ができなくなったと言って結ばれた」と報告している<sup>55</sup>。羽仁吉一はこの頃、『婦人之友』にも戦没した男子部卒業生について短文を寄せているが<sup>56</sup>、その真情が言い尽くされているかは判然としない。

このように、1950年代に行われた追悼会の記述では、戦時中の生徒・卒業生の「死」は「戦死」の表現と連続的に「尊い犠牲」として位置づけられており、戦争自体の問題性を問う姿勢はみられない。追悼会で羽仁夫妻が発言をしたのは確かで、生徒日誌や『学園新聞』が部分的に報告しているものの、彼ら自身の筆で戦没学徒の追悼に向き合う言葉は決して多くなかった。特に羽仁もと子は1950年に体調を崩しており、徐々に体の不自由も加わってきていた。羽仁吉一は1955年逝去、もと子は1957年に逝去した。

夫妻の逝去後、第二代学園長羽仁恵子（羽仁もと子・吉一の三女）の時期になると、学校として戦没者を思い起こし語り合う追悼の機会はほとんどなくなった。唯一、記録に残るのは、1971年自由学園創立50周年に、同学会（男子部卒業生組織）の主導により男子部卒業生の戦没者記念碑が建立されたことである。これについて『学園新聞』に書いた男子部卒業生は、「戦後二十七年、記念式は遅すぎた。しかし、志を同じくしたものが相集い、彼らを、そして戦争と平和を思うときが持ったことは、たしかによかった」と短く記している<sup>57</sup>。他方、女子部卒業生の慰霊碑が建立されたのは、それより10年以上後の1987年であった。

こうしてみると、戦時期の自由学園を率いた創立者・羽仁もと子、吉一夫妻が存命中の1950年代までは、夫妻のイニシアチブにより追悼の機会は設けられたものの、その後、その死をどのような意味で悼み、学校として覚えていくかについての言語

化は十分にされなかった。そうしたなかで、学校としての追悼の意思は明確な形で残らず、また次の世代があらためて主体的にこれを引き継ぐことがなかったといえる。これは戦後の自由学園が長い期間、自らの戦時期を対象化してこれられなかったことと対応している。前述のように、学内に自己検証の機運が生じたのは2000年前後以降のことである。

#### 4 節 女子部 23 回生による「語り」と川田文子の遺品の役割

戦後の自由学園が戦時中の生徒の死を語ってこなかったことと対照的に、川田文子の同級生にあたる自由学園女子部 23 回生（以下、女子部 23 回生）は 70 年以上にわたり同級生の死を記憶し、クラス内で、また母校の在校生たちに向けて、さらに学外で様々な聞き手を得て語り続け、語り直してきた。彼女たちのいわば人生を通じての取り組みが、川田文子を伝え生かす続けてきたといっても過言ではない（次節で後述する）。

もうひとつ、川田文子を語り継ぐために重要な役割を果たしたのが、川田文子の遺品であり、かつそれらが公的機関に託されたことであった。川田文子の遺族は 1968 年 7 月、財団法人動員学徒援護会が

建設した戦没学徒記念「若人の広場」<sup>58)</sup>に、娘・文子の遺品 16 点を寄贈した【表 2 参照】<sup>59)</sup>。

「若人の広場」への寄贈経緯の詳細は知られておらず、かつ若干の記憶の異同もあるが、いずれにしても、以後、川田文子の遺品は遺族の手を離れ、また自由学園の文脈を離れて「資料」として保存・活用されることになった。

ここで、川田文子資料（遺品）の来歴と自由学園および女子部 23 回生による追悼の取り組みを一覧化して確認する。【表 3 参照】

両者の動きを大まかに比較してみると、女子部 23 回生の活動は終戦直後から 2000 年代～2010 年代半ばまで連綿と続いていること、主に 2000 年代以降に、資料化された遺品が「平和博物館の資料」として明確に位置づけられ活用されていることが確認できる。さらに、2000 年代は戦争体験者の（最後の）活動と平和博物館の活動とが重なり合う時期といえる。

次に、4 節と 5 節で両者の展開を具体的に提示する。本節ではまず、川田文子の遺品の来歴を確認していく。前述のように、川田文子の遺品は 1968 年 7 月 19 日付で、完成間もない兵庫県淡路島南淡町（現南あわじ市）の「若人の広場」（1967 年 10 月 9

表 2 川田文子資料（遺品）（現・立命館大学国際平和ミュージアム所蔵）一覧

資料番号	資料名 ※原則的に Peace Archives 収蔵資料データベースによる	年代	2005 年展示 図録の整理番号	図録等に掲載・翻刻
00782	防空頭巾	1940 年代	2-1	図録 22 頁
00783	記章プレート	1944 年	2-3	図録 22 頁
00784	勤労報国際腕章	1944 年	2-2	図録 22 頁
29982	生活帳 [1944 年 4 月 17 日～10 月 1 日まで記述あり]	1944 年	2-6	図録 23、123-115 頁 / 『立命館資料研究』7 号、83-55 頁
29983	生活記録 [1944 年 4 月 17 日～11 月 30 日まで記述あり]	1944 年	2-7	図録 23、114-113 頁
29984	葉書 川田昌子差出 文子宛 (秋田県仙北郡生保内村友の会小保内セトルメント)	1943 年 10 月 17 日	2-8	図録 23、78 頁
29985	葉書 川田久長差出 文子宛 (中島飛行機武蔵野製作所女子寮)	1944 年 11 月 26 日	2-9	図録 23、78 頁
29986	葉書 川田文子差出 (東京都北多摩郡久留米村自由学園) 良子宛	1944 年 12 月 1 日	2-10	図録 23、78 頁
29987	書簡 坂本恒則差出 川田久長宛	1944 年 12 月 6 日	2-11	図録 77 頁
30400	弔辞文 東京都長官	1944 年 12 月 16 日	2-15	図録 67 頁
30401	書簡 進藤比那子差出 川田良子宛	1944 年 12 月 24 日	2-12	図録 76 頁
30402	書簡 進藤文子差出 川田久長夫妻宛	1944 年 12 月 26 日	2-13	図録 76 頁
30403	故川田文子葬儀次第	1944 年 12 月 16 日	2-4	図録 23 頁
30404	弔辞文 同級生一同	1944 年 12 月 16 日	2-14	図録 70-68 頁
30405	寄付金受領書	1944 年 12 月 30 日	2-5	図録 23 頁
30406	川田文子遺影	1944 年	なし	図録 22 頁

表3 川田文子資料（遺品）の来歴と自由学園および女子部23回生の追悼の取り組み

年代	川田文子資料（遺品）の動き	川田文子同級生（女子部23回生）および自由学園の動き
1945.11.12		学徒勤労働員中に亡くなった5名（通勤中のバス事故で赤木二葉、高松和子、古川寿美、武蔵製作所の空襲で川田文子、卒業後に広島原爆で吉岡豊香）の追悼会 遺族、羽仁夫妻、新卒業生（23回生）、高等科3年生計90名が参加（於女子部講堂、女子部食堂）女子部体操館前で23回生16名の記念写真あり
		戦後しばらくの間、川田文子の命日に同級生が川田家を訪問
1952.5.2		全国戦没者追悼式（於新宿御苑）に合わせて自由学園で追悼礼拝 男子部卒業生11名、女子部生徒4名の戦没者を追悼
1955.5.2		男子部二十年記念式で男子部戦没者の追悼式（於男子部体育館）羽仁吉一が「雑司ヶ谷短信 男子部開学二十年」（『婦人之友』1955年6月号）で男子部戦没者について言及
1957.11.16		[女子部] 卒業生大会で23回生による報告あり（同級生死亡については言及なし）
1967.10.9	淡路島南淡町（現南あわじ市）の大見山山頂に戦没学徒記念「若人の広場」（モニュメント、資料館、宿泊施設、大ホール）完成、竣工式と慰霊祭 1969年4月に財団法人動員学徒援護会により広場施設他の寄贈を受けて文部省主幹の「財団法人戦没学徒記念若人の広場」が発足（理事長：宮原周治）	
1968.7.19	川田文子資料16点（遺影含む）が動員学徒援護会に寄贈「若人の広場」で展示開始	
1972.2.25-3.1	「東京大空襲展：炎と恐怖の記録」（主催・東京空襲を記録する会、於東急日本橋店7階グランドホール）に「防空頭巾など川田文子さん遺品」が展示	
1972.6.18		同学会（男子部卒業生組織）により男子部卒業生戦没者記念式と記念碑除幕式
1972.11.11		[女子部] 卒業生大会で23回生による報告あり（同級生死亡についての言及なし）
1975.11.1		[女子部] 卒業生大会に卒業30年記念で23回生参加（人数不明）、戦時中在学した女子部20~31回生が「戦時中の南沢」を報告 学徒勤労働員中に亡くなった4名について言及
1975.12.10		望月愛子「娘より母への手紙 動員女子学徒の使命を思ひて」『婦人之友』（1944年12号所収）が平凡社編集部編『ドキュメント昭和世相史・戦中篇』（平凡社、1975年）に再録
1978.8.9		23回生が青山「津久茂」で川田さん、吉岡さんを偲ぶ会
1979.夏		23回生4名が広島訪問 吉岡豊香の勤務地・控訴院跡、慰霊碑、過去帳が残る竜泉寺、町営墓地など
1985.10.19		[女子部] 卒業生大会に女子部23回生37名参加、卒業40年記念報告「私達の学園生活」川田文子、吉岡豊香について言及
1980年代後半～		1980年代後半に自由学園の歴史Ⅱ（1934～1957年度）編纂開始（1991年5月刊行）収集した資料をもとに、特に戦時中の出来事について「戦時中の記録」をまとめ、23回生の記録については『自由学園二十三回生の記録 卒業五十年に際して』（1995年）として冊子化
1987.1.19		23回生8名が淡路島の「若人の広場」訪問 川田文子資料の撮影も（※「若人の広場」への寄贈経緯の記憶が異なる）
1987.5.16		学徒勤労働員中の交通事故で死亡した赤木二葉、高松和子、古川寿美、空襲で死亡した川田文子の慰霊碑（女子部生徒制作）完成 記念礼拝 ※吉岡豊香の氏名は含められず（『自由学園二十三回生の記録』、153-154頁。）
1989		保谷市・戦争体験をつづる会編『なつくさ』第九号（1989年）に、23回生の野田清子「中島飛行機の思い出」、「『国卒』の人たち」（当時の日報から）、直江千鶴子「川田さんの殉職」を寄稿 ※保谷市戦争体験をつづる会発足は1981年
1991.5		自由学園女子部卒業生会編『自由学園の歴史Ⅱ』（婦人之友社、1991年）刊行
1991.6.2		23回生5名が広島訪問、吉岡豊香ゆかりの地を訪問
1994年	「若人の広場」閉園 収蔵資料は現地で保存	

1995.2.4-3.19	「東京大空襲：戦時下の市民生活」(江戸東京博物館)に川田文子さん資料6点含む「若人の広場」収蔵資料33点が展示 ※阪神淡路大震災発生前日(1月16日)に展示品が東京へ搬出 展示終了後の3月末に「若人の広場」に返却	
1995. 秋		1980年代後半から『自由学園の歴史II(1934～1957年度)』編纂用に資料収集・回想執筆した資料類をもとに、23回生が『自由学園二十三回生の記録 卒業五十年に際して』(1995年)を冊子化
1995.10.28		[女子部] 卒業生大会に23回生43名参加、卒業50年記念報告「卒業後私の歩んだ道」
1996 頃		牛田守彦(法政大学中学高等学校教諭)と23回生野田清子、直江千鶴子らとの交流始まる
2000.12.15		自由学園図書館横に23回生によって吉岡豊香(卒業後広島で被爆死)と川田文子の慰霊碑完成
2001.11.18		男子部卒業生戦没者の慰霊碑修復記念礼拝 修復の際に戦没者を1名追加 同学会員60名参加
2001.11.23		2001年8月末、NTT(株)武蔵野開発センター内の旧中島飛行機武蔵製作所の建物および「地下道」の取り壊しに際して、記録保存・公開等を武蔵野市等への陳情等を行い、一定録を得たことを受け、武蔵野商工会館ゼロワンホールで「シンポジウム 中島飛行機と武蔵野の戦争遺跡と戦争体験 ―いま、地域の戦争をどう語り伝えるか?―」開催(100余名参加)これらの活動を契機に「武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会」が発足へ
2002.1.27		武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会発足 23回生数名が入会
2002.3.31		「中島飛行機武蔵製作所での学徒勤労動員を聞き、語る会」(主催:武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会、工場跡地にある武蔵野中央公園北ホール、元学徒40人を含む150人参加)で、23回生直江千鶴子も参加。「国のために死ぬのは怖く無いと思っていました。今、自爆テロのニュースを耳にしても、不思議とは思いません。教育は恐ろしい」とコメント
2003.7		武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会編・発行『証言・学徒勤労動員:中島飛行機武蔵製作所に動員された学徒の記録』(2003年7月)に23回生の羽田澄子「私の仕事は旋盤工」、直江千鶴子「川田さんの死」を寄稿(『自由学園二十三回生の記録』抄録)
2003.8.7		23回生で映画監督の羽田澄子講演会「戦争体験から何を学ぶのか?中島飛行機武蔵製作所への学徒勤労動員のことなど」(主催:武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会、於武蔵野公会堂ホール、約230名参加)
2004.6.6		「フィールドワークと体験を聞く会 自由学園の校舎・慰霊碑、中島への「引込み線」跡をたどり、軍需工場での体験を聞く」(主催:武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会)を自由学園を会場に開催 校内の慰霊碑や学校工場となった校舎見学と元勤労学徒3組の証言 自由学園から23回生の野田清子、直江千鶴子、毛利愛子が報告
2004.12.10	「財団法人 若人の広場」所蔵資料約950点が立命館大学国際平和ミュージアムに寄贈	
2005.10.15		[女子部] 卒業生大会に23回生25名参加、卒業60年記念報告「平和への祈り」
2005.12.1-12.16	リニューアル記念・戦後60年企画 立命館大学国際平和ミュージアム特別展 「ぼくたちわたしたちの生きた証:『若人の広場』旧蔵・戦没動員学徒遺品展」に川田文子資料15点(17点)が展示	23回生が立命館大学国際平和ミュージアム展示を見学
2013-2014 年ヵ		23回生の羽田澄子が「学徒勤労動員」を題材に映画製作開始、川田文子資料(平和ミュージアム蔵)の撮影も
2015年3月	2013年から南あわじ市により、被害を受けたモニュメントや建物が修復・整備され、2015年3月に「若人の広場」が再開園 展示品のなかに川田文子資料パネルあり	
2015.10.17		[女子部] 卒業生大会に23回生7名参加、卒業70年記念報告「卒業70年、戦後70年の節目に」 羽田澄子監督の映画「いま想う、学徒動員のこと」製作のため撮影も

2018.12 (2019.1) ~ 2020.3	東京大空襲・戦災資料センターの常設展示中、三多摩の空襲に関する資料として、川田文子の遺影・葉書・生活記録（資料写真）が展示	
2022.10	自由学園高等科3年生徒が「ぼくたちわたしたちの生きた証」図録所収の川田文子資料等をもとに「探求」学習、その成果を冊子『川田文子さんのこと』（山澤遥乃・山澤綾乃著、自由学園出版局、2022年10月、67頁）としてまとめる。冊子内に立命館大学国際平和ミュージアム所蔵の川田文子資料画像を使用	『川田文子さんのこと』刊行後に23回生（卒業生会で16名の現住所把握）に冊子寄贈（直接にお返事をいただけた方はなし）
2023.3.3	第27回メディア資料研究会（平和博物館における戦争体験継承プロジェクト共催）で「戦争体験が無い世代が伝える戦争の記憶2 自由学園の勤労働員学徒川田文子さんをめぐって」に山澤遥乃、山澤綾乃、村上民が口頭発表、『立命館大学国際平和ミュージアム 資料研究報告』第6号に同研究会報告と川田文子資料紹介が掲載（兼清順子氏記）	
2022.10 ~	『川田文子さんのこと』刊行以後、自由学園内外での教育研究利用、複数メディアでの紹介を通じて川田文子資料の紹介すすむ	

日竣工)に寄贈された。まもなく展示されたと思われる。

川田文子資料（遺品）は「若人の広場」<sup>60)</sup>という「学徒勤労働員の慰霊と顕彰の文脈」<sup>61)</sup>に置かれつつも、その一方で、東京空襲、特に三多摩地域の軍需工場への空襲被害、動員学徒の状況を伝える資料として、東京の地で複数回、展示されてきた。1972年、1995年、2018年<sup>62)</sup>の3回が現時点では判明しており、その最初の機会は、1972年に東京空襲を記録する会が主催した「東京大空襲展 炎と恐怖の記録」であった。「防空頭巾など川田文子さん遺品」が展示されたことが図録に明記されている<sup>63)</sup>。東京空襲を記録する会や東京大空襲・戦災資料センターが「若人の広場」資料群についての情報を持っていたことが、川田文子の遺品を「戦没学徒」としてだけでなく「東京の空襲被害」の文脈に結びつけ、後の展示機会につながったと考えられる。

1995年2月～3月、再び東京で開催された「東京大空襲：戦時下の市民生活」（江戸東京博物館）で、第三部「戦争と市民生活」のなかに「学徒と戦争」の章がたてられ、その展示品54点中のうち約半数（29点）が「若人の広場」所蔵資料で構成されている。川田文子資料は6点出品された。当時の担当学芸員・板谷敏弘氏によれば、「学徒と戦争」展示の準備段階で、東京空襲を記録する会の情報提供により「若人の広場」資料の存在を知ったという<sup>64)</sup>。

ところで、兵庫県淡路島の南端に位置する「若人

の広場」は、来館者減少等の理由で1994年に閉園、関係資料は財団法人若人の広場・財団法人動員学徒援護会によって管理されていた。前述の板谷氏が借用資料の搬出のため淡路島の「若人の広場」を訪れたのは、まさに阪神淡路大震災の前日、1995年1月16日だったという。東京での展示期間終了後の3月末に、板谷氏は財団側の申し出にしたがって資料返却のため再び現地に赴いたが、建物には被害がみられたとのことである<sup>65)</sup>。閉園、震災被害と続いた「若人の広場」では、収蔵資料の管理には困難が多かったことが推測される<sup>66)</sup>。こうした状況で、川田文子資料を含む関係資料が何とか散逸を免れたことになる。

2004年12月に「若人の広場」資料約950点が立命館大学国際平和ミュージアムに寄贈され、以後、これらは「平和博物館の資料」として明確に位置づけられることになった。1年後の2005年12月には「リニューアル記念・戦後60年企画 立命館大学国際平和ミュージアム特別展「ぼくたちわたしたちの生きた証：『若人の広場』旧蔵・戦没動員学徒遺品展」が開催され、勤労働員中に空襲や原爆で亡くなった学徒の遺品約200点が展示、川田文子資料15点も展示された。「遺品に加えて戦没学徒一人ひとりの勤労状況や日常生活が分かるような説明を加えることで、彼らの悲劇的な死だけではなく、生にも光を当てた展示を行います」とあるように、戦没学徒の遺品をそれまでの生を「生きた証」として捉えなおす視点が加わっている。この展覧会では、

遺品の翻刻や豊富な関連資料を掲載した図録【資料D】や紀要が刊行された<sup>67)</sup>。この詳細な図録が、自由学園生徒・山澤姉妹が川田文子資料の存在を知るきっかけとなったのである。

## 5 節 女子部 23 回生による追悼と語りの継続と深化

川田文子の同級生である女子部 23 回生は、川田の死後直後から個人またはクラスとして川田文子の死を悼み、語り続けてきた。しかしその長期にわたる活動はなかなか表だって知られることはなかった。本節では彼女たちの取り組みに焦点を当てる。参考にした資料は、女子部 23 回生が 1995 年にまとめた文集『自由学園二十三回生の記録 卒業五十年に際して』【資料B】、女子部卒業生の機関誌『卒業生会報』、地域の戦争体験を記録する市民グループと女子部 23 回生との関わりを示す資料【資料C】である。

女子部 23 回生の取り組みの特徴として、①長期にわたる追悼と語り、②地域の戦争体験や空襲被害を記録する市民グループとの交流、③これらによる語りの変化、が挙げられる。この三点に絞って、彼女たちの取り組みを整理する。

女子部 23 回生（1938 年 3 月に自由学園女子部に入学、1945 年 3 月卒業、卒業時 87 名）は、文字通りの戦時下に学生生活を送り、高等科 3 年の一年間は動員学徒として 3 つの軍需工場に分かれて勤務し、その動員生活の中で川田文子を失った。また、卒業後に広島に帰郷した吉岡豊香を 8 月 6 日の原爆で失っている。家族が暮らす満州に戻った者も数名あり、敗戦後に引揚げてきた者、台湾に帰国した者もあった。

表 3 にあるように、同級生たちは川田文子、吉岡豊香の死を記憶し続け、追悼を重ねてきた。特に彼女たちが 50 歳代、60 歳代となる 1970 年代から 80 年代にかけて、追悼会の開催やゆかりの地への旅行、母校の『自由学園の歴史Ⅱ』【資料A】編纂作業と並行して戦時期の記録の読み直しや文集作成に取り組んだ。卒業生大会等で戦時の経験を母校の後輩たちに伝え、慰霊碑建立を学校側に働きかけるなど、70 年以上にわたってたゆみなく活動してき

たことがわかる。

なお、学徒勤労働員を経験した当事者（1925 年前後～1930 年頃生まれ）による記録収集・証言の文集作成は、他の学校等においてもほぼ同時期の 1980 年代～1990 年代、年齢としては 50 歳代から 60 歳代に集中しており<sup>68)</sup>、女子部 23 回生の記録整理や文集作成時期もそれに重なる。

女子部 23 回生が 1995 年にまとめた文集『自由学園二十三回生の記録 卒業五十年に際して』【資料B】は、1980 年代後半から準備され、勤労働員日誌・個人日記など当時の記録と後年の回想によって戦時の学校生活を再構成したものである。断片的な記憶も含めて多様な語りが収録されており、公式的な学校史には収録しにくい複雑な内容も含まれている。

この文集には各人の戦後の歩みも収録されており、川田文子、吉岡豊香の追悼会（1945 年 11 月、1978 年）、広島で被爆死した吉岡豊香のゆかりの場所を訪ねる旅の報告（1979 年、1991 年）、卒業生大会での報告（1985 年）、淡路島の「若人の広場」訪問（1987 年）、慰霊碑の建立（1987 年）等が記録されている。

また、女子部 23 回生の戦争体験は自由学園のそれにとどまらず、地域社会の戦争体験、空襲記録として共有されていった。まず、1980 年代以降、23 回生数名は地域の戦争体験を記録する取り組みとの協働・交流のなかで自らの経験を語り始める。そうした経験のなかで、彼女たちの証言はより具体的に、より普遍性ある証言に練り上げられていった。

その一例として、直江（旧姓藤岡）千鶴子の証言を挙げたい。前述のように、これは 2021 年に山澤姉妹が「探求」活動において最も重視する証言の一つでもある。

直江を含む数名の 23 回生は、保谷市・戦争体験をつづる会<sup>69)</sup>編『なつくさ』9 号（1989 年、中島飛行機と保谷の戦争体験を特集）で、川田文子について、自由学園の文脈を離れ、（おそらく初めて）自身の回想を発表した。直江は「川田さんの殉職」の最後の一文を、「戦争はもう絶対にあってはならないし、そうなることを決して皆で許してはならな

い、と切に思う」と締めくくっている。

この文章の発表（1989年）以降、直江千鶴子は前述の『自由学園二十三回生の記録』（1995年）、『証言・学徒勤労働員 中島飛行機武蔵製作所に動員された学徒の記録』（2003年）【資料C】にもほぼ同じ趣旨の文章を発表（転載）している。最後の一文を堅持しつつ<sup>70)</sup>、『証言・学徒勤労働員』においてはタイトルから「殉職」の語を外し、この表現を使わなかった。

また、女子部23回生数名は2002年1月に発足した「武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会」（代表：川村善二郎、事務局長：牛田守彦<sup>71)</sup>）と積極的に交流し、中島飛行機武蔵製作所等に動員された当事者として証言活動を行い、先に紹介した『証言・学徒勤労働員 中島飛行機武蔵製作所に動員された学徒の記録』にも文章を寄せている。【表3参照】牛田守彦によれば、牛田と女子部23回生の野田清子、直江千鶴子らとの交流は、武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会発足以前の1996年頃からであり、同会発足後、彼女たちは熱心な会員として活動に協力したという。同じ女子部23回生の羽田澄子（映画監督）は同会での交流等を通して、90歳を目前にして自身の最後の映画製作の題材を「学徒勤労働員」と思い定め、牛田へのインタビューも収録した<sup>72)</sup>。羽田は2014年頃には立命館大学国際平和ミュージアム所蔵の川田文子の遺品の撮影にも取り組んだという<sup>73)</sup>。

こうしてみると、川田文子、吉岡豊香の死は同級生・女子部23回生によって長く記憶されたが、同級生の間だけでなく母校の後輩たちへ、そして地域で戦争を記録し続けようとするグループとの交流の中で語り直されていくなかで、様々な人々に通じる「言葉」が練られ、共有されていったことがわかる。野田清子は、友人の死が「いつも私たちの心から離れず、重い課題」であり続け、「計り知れない平和の重み」を想起させるものだったと語っている<sup>74)</sup>。

他方、動員学徒を送り出した自由学園の側に、この悼みの行為、生徒たちの死を繰り返し思い起こし語り続ける努力のきわめて少なかった事実は深く省

みられなければならない。次章で山澤姉妹の取り組みの意義を考える際に、このことにまた戻って考えてみたい。

## 4章 おわりに ふたたび「川田文子さんのこと」、そしてこれからの課題

### 1節 ポスト体験時代における「川田文子」との出会い、読解、表現

川田文子の死をめぐる記憶と記録は、長い時を経て、2021年、山澤遥乃、綾乃姉妹の「探求」と不思議な接点をもった。

山澤姉妹は女子部23回生と直接会っていない<sup>75)</sup>。山澤姉妹が「川田文子」に出会ったのは、何よりもまず学内に置かれた慰霊碑に、川田文子の遺族の「代わりに」花を届ける行為によってであった。

山澤姉妹が少しずつ「川田文子さんのこと」を知るようになったのは、女子部23回生が60歳代になって改めて川田文子の死と自らの戦争体験を振り返り、他者に向って語り直した各種証言集を通してであった。また、かつて戦没学徒慰霊施設の閉園と震災被害によって保存の危機にさらされた遺品類が平和博物館に移管され、「生きた証」の資料として展示された、その図録を眺めることによってであった。

山澤姉妹が直接目にした種々の記録類の背後に、川田文子の生と死を語り続け、語り直してきた戦争体験者たちの長い模索と語り直しがあり、戦争体験の継承と対話の場として資料を保存し、意味を読み取り文脈を与えて展示を行ってきた慰霊施設・平和博物館の調査研究活動があった。それらの営為が、大きな時間の隔たりをのりこえて現代の高校生・山澤姉妹を川田文子に出会わせたといえるだろう。

一方で、兼清順子は川田文子資料の側からこの出会いを表現する。「残された資料を通して19歳の川田文子さんの生を浮かび上がらせ、その中に全力で飛び込み、80年近い時間を越えて向き合う聴き手を得た、実に稀有な資料」だという<sup>76)</sup>。

確かに、山澤遥乃、山澤綾乃の資料や物事への向

き合い方、読解（解釈）にはひとつの特徴がある。それは、二人が自分の身体をよくはたらかせ、身体を通して事柄を理解し表現するという「自分の方法」を持っていたことだ<sup>77)</sup>。隣家に住む早川喜久子さん（この方が偶然にも川田文子の姪だった）の頼みを快く引き受け、慰霊碑に花を供えることから始めて、手作りのジンジャーケーキを持って早川さんに話を聞きに行く、川田文子が続けた「生活帳」を自分の手でもう一度ノートに筆写する、アレクシエーヴィチ「戦争は女の顔をしていない」の漫画化されていない一場面を自分で描いてみる、「直江千鶴子の」証言を厳密に読解し、漫画アプリを使いコマずつ指で描いていく等々。このように、山澤姉妹は川田文子の死をめぐる記録や記憶を自分の身体の手を存分にはたかせながら読み解き、川田文子の具体的で個別的な「生」の在り様——何を食べ、何を作り、友達とどんな会話をしていたのか、何に一生懸命だったのか——を受けとめ、「川田文子さん」を造形した。彼女達の生き生きとした読解と表現は、川田文子の「生」の側から戦争を考え直すことを読者に促す。

川田文子の際立った「生」が、一学校生徒の在り様であることを越えた「戦争体験」へと開かれたことで、『川田文子さんのこと』は今、自由学園の文脈を離れて様々な年代の方々に受けとめられつつある。

## 2 節 これからの課題 記憶と記録の変容と空白を語り継ぐ

『川田文子さんのこと』は、戦争について、あるいは自由学園史についての詳しい知識がなくても、川田文子さんを「自分の友達」が「まるで隣の教室にいるかのように」（生徒の感想）身近に感じさせてくれる。それゆえにこそ、「もう戦争は絶対にあってはならないし、そうなることを皆で許してはならないと思う」という直江千鶴子のメッセージが学内外の多くの読み手に届いているのだろう。

山澤遥乃が漫画の最後のシーン（31 ページ）を描き始めた2022年2月24日、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった<sup>78)</sup>。世界情勢の混迷を理由

に「戦時への備え」が当然視されかねない現況にあって、「川田文子さん」を自分の友達として改めて覚え忘れないことは一つの足場となり得るだろう。

現在、『川田文子さんのこと』は学内外で平和教育の実践やそれを研究する人々の題材として用いられており、山澤姉妹、筆者自身もこれを使った授業等を試みている段階である<sup>79)</sup>。今後、『川田文子さんのこと』を用いていくにあたっての課題を挙げ、本稿のまとめとしたい。

それは、「川田文子さんのこと」が内包する二つの可能性——すなわち、「川田文子さん」を通じて戦争の問題性を明確に伝える「分かりやすさ」と、「戦争体験」の再考という「分かり難さ」があると捉えた上で、その両方を語り続けていくべきだ、ということである。戦争の問題性を身近なもの、自分に関係あるものとする前者については、「川田文子さんのこと」自体が見事にその役割を果たしている。したがって、筆者のとらえる課題は、後者の戦争体験の語りの不在や変容も含めた「分かり難さ」を、「川田文子さんのこと」を通じて伝えていくことにある。

まず、自由学園コミュニティ内において、「自分たちの」戦争体験として「川田文子さんのこと」を継承していくためには、「川田文子さんのこと」が生れるまでの自由学園の、そして女子部23回生の記憶と記録の歩み、さらにそこに含まれている空白、忘却、変容とその契機について、記録の読解と構造化を行い、その全体像を語り続けていく必要がある。具体的には、川田文子の死をめぐる記憶と記録の変遷について一次資料を提示／展示してその違いや空白を示し、その流れのひとつに『川田文子さんのこと』を位置づけることも一案だろう。特に、このなかに「空白」があること、つまり自由学園がその死を十全には語らず、自らの戦争体験を対象化してこなかった「空白」があることについても意識的に語っていく必要がある。

さらに、川田文子を含む生徒たちがなぜ勤労動員されたのか、戦時体制下での自由学園の選択と行動について概要を示すことで、戦争が学校教育といかに密接に関わるのかを実例をもって示すことができ

る。「川田文子さんのこと」においては「川田文子さんの死」の不条理性が印象的に描かれているだけに、その死を「不条理」一般に回収させず、勤労働員が戦時の「教育として」推進されたこと、その結果としての生徒の死亡であることを明確に語る必要がある。

さて、『川田文子さんのこと』は自由学園の文脈を離れても受容される可能性があり、「自由学園の」戦争体験が問われる場合ばかりではない。そうした場合でも、戦争体験が必ずしも「最初から」反戦平和の刻印を帯びているわけではないこと、その体験が何だったのかを体験者自身が悼みながら問い直し、語り直していくという戦争体験の変容のプロセスがあること、それらに意識を向けることには意味があるはずだ。

このように、戦争体験の継承のプロセス—「川田文子さんはいかにしてあなたの友達になったのか」—に注意をむけるよう促すこともまた、継承実践のひとつとなり得る。戦争体験者の不在を目前に、残されて「ある」記録の情報だけを急いでつなぎ合わせてしまうのではなく、戦争体験の継承のなかに含まれている空白、忘却、変容の在り様も含めてそれを知ろうとすることは、単に「経緯を知る」ことに留まるものではない。それは、今、私たちが受け取っている「戦争体験」が何であるのかを考えなおし、もう一度受け取りなおすにつなげるのではないだろうか。

## 【注】

- 1) 「老いる被爆者組織」『毎日新聞』2023年8月6日朝刊、4頁。「終戦の日 追悼式 78年 平和の尊さ継ぐ」、「平和学習『困難』7割 小学校アンケート」、「平和学習 悩む現場 教員も『戦争』知る機会減り」『毎日新聞』2023年8月16日、1、3頁。
- 2) (a) 子どもの頃に戦争体験をした八〇歳代の「戦争の子ども」たちによる戦争体験の継承実践、また彼ら彼女らが研究対象として取り上げられること、(b) 戦後生まれたが親の戦争体験に強く影響を受けて育ってきた人たちが担う継承実践、(c) 親や親族等から直接的に戦争体験を継承してこなかったもつと若い世代が担う従来型の継承実践、(d) 従来の反戦平和的な継承活動を相対化し、自らの歴史認識やナショナリズムに沿って戦争体験を読み替えていく継承実践、(e) 特攻を反戦平和としたり、特攻死を殉国の象徴として顕彰したりする従

来型と一線を画し、特攻などの戦時の極限状況下での生と死を現代の生き方に反映させようとする継承実践、(f) 観光としての戦争体験や戦争遺跡に注目する無自覚的継承実践、(g) 国際的な人権レジームのもとに戦争犯罪や植民地犯罪を問いただすグローバルな運動と連携していく継承実践等々として整理でき、実際には複数の傾向をもつ継承実践があると分析されている(13-14頁)。

- 3) 赤澤史朗「戦後日本の戦争責任論の動向」『立命館法学』274号、2001年3月、2607-2633頁。
- 4) 自由学園中等科・高等科のカリキュラム改革の一環で新設された科目の一つで、2020年度から開始した。生徒の主体的な学びの姿勢や豊かな創造性を養うことを目的として、一人ひとりの問題意識から始まる「探究」の学びの先に、「自分はどうに生きていきたいか」、人生の本質的な問いに向かう真理の探求者となることを目指し「探究」の語を用いている(自由学園一〇〇年史編纂委員会編『自由学園一〇〇年史』、自由学園出版局、2021年12月、241頁、682-684頁)。
- 5) 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 自由の名」、『婦人之友』1946年2月号、32頁。
- 6) 自由学園100年史編纂委員会編『自由学園一〇〇年史』自由学園出版局、2021年、132-137頁。
- 7) 蘭信三「序章 課題としての(ポスト戦争体験の時代)」、蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』、みずき書林、2021年、17-20頁。
- 8) 戦時下自由学園の記録の編集や回想をまとめる取り組みについては、村上民「戦時下における自由学園の教育(1) 各種学校・自由学園の存続問題を中心に」、『生活大学研究』vol.6(2021年)、85頁。
- 9) 同上。特に自由学園初等部の疎開に関する文集『あしおと—那須の記録・いま生き生きと』(企画・編集:初等部14回生、1977年)がある。
- 10) 同上、77-78頁。
- 11) 斉藤道子「羽仁もと子 生涯と思想」(ドメス出版、1988年)、奥田暁子編『女性と宗教の近代史』(三一書房、1995年)などがある。
- 12) 婦人之友社建業100年を迎えた2003年に開催された座談会「歴史の光と影 『婦人之友』と戦争」(出席者:内海愛子、大貫隆、加納実紀代、深田未来生)(『婦人之友』2003年8月号、60-82頁)では、自由学園学生による戦時下自由学園に関する研究の意義も語られた。この座談会への反響は大きく、『婦人之友』ではその後半年間にわたって投書や関連記事が掲載され、自由学園内でも様々な世代で議論が高まった。
- 13) 自由学園資料室の発足経緯や機能については、菅原然子「私立学校におけるアーキビストの役割に関する一考察 自由学園資料室の親組織への資料活用活動から」、『生活大学研究』vol.6(2021)、44-55頁。
- 14) 『自由学園一〇〇年史』巻末に自由学園最高学部研究紀要『生活大学研究』に発表した「100年史関連論考」18本のタイトルが記されている。このうちの7本で戦時期の自由学園を取り扱っている。
- 15) 自由学園初等部6年生社会科(自由学園初等部「疎開絵巻」等)、中高の平和学習(学内慰霊碑めぐり、戦時中の生徒日誌や食事記録等)、大学部講義(戦時中の日誌、羽仁吉一手

稿等)、中高 TLP (聖書科と自校史) : (戦時中の日誌類) 等、授業・講義で児童生徒学生に戦時中の記録資料の現物を展示・解説する機会が増えてきている。このほか、大学の卒業研究等でも活用されている (2023 年度は 4 件の研究テーマで記録資料を利用)。

- 16) こうした活動は「戦時の社会改革」(米谷匡史)の発想ともつながりがあり、1930 年後半の国民精神総動員運動との親和性もあった。たとえば、国民精神総動員運動として推奨された資源節約、出征兵士家族の生活支援、戦時の生活合理化などの活動に、自由学園、友の会、婦人之友社は積極的に取り組んだ。自由学園の「生活」重視教育たる「生活即教育」は、実社会への働きかけを強めていくなかで、戦時体制との明確な対立軸をもたず連続的に行われた面があった(村上民「戦時下における自由学園の教育(2) 戦時下「生活即教育」の諸相」、『生活学研究』vol.6 (2021)、92-94 頁; 前掲『自由学園一〇〇年史』、90-92 頁)。
- 17) 前掲『自由学園一〇〇年史』、108 頁。
- 18) 当時、学校教育制度の周縁部に位置することは、特に男子にとっては兵役上の特典や上級学校への進学資格が得られないなど不利益も多かったが、より独立性の高い自由教育が行うため、羽仁夫妻は男子中等教育も「各種学校」として行うことを選択した。
- 19) 水野真知子『高等女学校の研究(下) 女子教育改革史の視座から』、野間教育研究所、2009 年、638-644 頁。
- 20) その交渉過程で、自由学園は文部省および東京都から、自発的に「名称変更」(校名「自由」の変更)するよう繰り返し圧力をかけられていた。(前掲『自由学園一〇〇年史』、102-107 頁。)
- 21) 同上、108-110 頁。
- 22) 自由学園は近隣の工場からの要望に即応して、女子部卒業生を対象に「挺身隊訓練会」を実施(11~12月)、校内の男子部実験工場での作業訓練を行い、これから組織される「女子勤労挺身隊」の生活指導について研修を行った。並行して女子部最上級学年である高等科3年生(女子部22回生)は卒業前3カ月間、近隣工場等でモデル的に工場労働や女子職場整備の仕事を担当、そのうち数名は卒業後も工場勤務に従事した。
- 23) 自由学園評価の要因の一つとして、中島飛行機武蔵製作所の勤労部長と田無製造所所長がいずれも自由学園生徒の保護者であったことが関係している可能性がある。
- 24) 戦時下勤労動員少女の会がまとめた『記録一少女たちの勤労動員—女子学徒・挺身隊勤労動員の実態』(BOC 出版、1997 年)所収、「勤労動員の实態調査」(全国)の各学校の「作業内容」を確認したところ、「女子職場」の整備に関する作業と推測されるのは、東京都では日本女子大と自由学園のみだった。日本女子大が家政科一類4年生(1944.7-9 卒業、通勤)が、東京の明電社で「勤労課学徒係」、同一類3年生(1944.7-1945.8、寮生活)が川崎市の住友通信で「女工具寮の寮母、製図」と記載されている。ちなみに自由学園については、自由学園高等科3年が大日本兵器湘南工場、中島飛行機武蔵製作所、中島航空金属田無製造所で、工作機械・航空機の製作と並行して「女子寮の生活指導・世話係」、「国民学校卒挺身隊の世話」、「女子寮の管理」と記されている(219-221 頁)。日本女子大の記述の出典は、日本女子大四三

回生卒業三〇周年記念文集委員会編『戦いの中の青春—一九四五年日本女子大卒業生の手記』(1975 年)と思われる。自由学園については、自由学園女子部卒業生会編『自由学園の歴史II』(婦人之友社、1991 年)および自由学園女子部23回生編・発行『自由学園二十三回生の記録』(1995 年)と思われるが、参考文献には入っていない。なお、同調査は全国を対象にしているが、他地域で類似の作業内容の記載はなかった。また同書でまとめられている女子学徒・挺身隊の主要な「作業内容」(18-35 頁)にも、「女子職場」の管理的な業務は項目化されていないから、これは女子学徒の作業内容としてかなり特異なケースだったのだろう。

- 25) 川島善二郎『『武蔵野』地域の戦争体制と市民の戦争体験、武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会編・発行『証言 学徒勤労動員—中島飛行機武蔵製作所に動員された学徒の記録—』、2003 年、110-111 頁。
- 26) 1943 年頃から、初めは工学系大学生の短期間の工場実習として開始、1944 年3月頃には高等女学校卒業直後の女子挺身隊(実態は不明点多し)、ついで1944 年4月からの学徒の「通年動員」が開始した。武蔵製作所の場合、何回かに分けて学徒を受け入れた。第一次動員(4月8日)は、商業学校など実業系学校5校(内、女子校が1校)最上級生が動員、つづいて自由学園女子部高等科3年生が動員された(4月17日)。第二次(5月)は大学および専門学校学生、第三次(6月)は中等学校中心で5校の生徒(高等女学校は最上級の5年生)が動員された。その後も11月までが動員受入が続いた。(1945 年以降は実態が不明な点も多いという。)(牛田守彦「中島飛行機武蔵製作所への学徒勤労動員について」、前掲『証言 学徒勤労動員』、116-117 頁。)
- 27) 同上、98-99 頁。
- 28) 前掲『自由学園二十三回生の記録』には、「厚生課には自由学園の他、女高師、家政学院、立正高女の学徒が4、5名ずつ配属されていたが、皆各々の係があつたとのことだが、他校生徒の「厚生課」に関わる証言は現時点で確認できていない。
- 29) 前掲『自由学園二十三回生の記録』、85 頁(羽田澄子記)。
- 30) 「動員学徒として働いた日々 中島飛行機武蔵製作所にて」、前掲『自由学園の歴史II』、199-202 頁。当時女子寮は16棟あり、各棟に配置されていた寮監は寮生の監督、生活指導、安全管理などの責任を負っていた。したがって、自由学園生徒の役割は寮監とは別に、生活の場面により近いところでの働きかけや支援だったと思われる。一方で、「女子寮にはもともと会社の管理システムが出来上がっているのだから、中々具体的な仕事がなかった」との回想もある(『自由学園二十三回生の記録』、95 頁)。
- 31) 前掲『自由学園二十三回生の記録』、64 頁。
- 32) 川田文子姉のご息女(川田文子の姪)の早川喜久子氏によれば、「祖父(川田久長)と羽仁夫妻とは「関係が深かった」という。『婦人之友』が「宗教的な理由」(1943 年頃と思われる)で発刊できなくなったときに大日本印刷の川田久長が尽力し、雑誌の印刷を引き受けたときいているという。仕事上のつながりもあって、川田家には雑誌『婦人之友』や『子供之友』が豊富に置かれていたという(2023 年3月10日インタビュー)。

- 川田久長は戦後、『活版印刷史 日本活版印刷史の研究』（印刷学会出版部、1949年）を著しており、その扉に「自由学園に学び勤労学徒として若き命を戦禍に失いたる三女文子の霊に」との献辞がある。
- 33) 自由学園女子部卒業生会編『自由学園の歴史Ⅱ』、婦人之友社、1991年、180頁。
  - 34) このうち7月22日～12月6日までの項目を、山澤綾乃が前掲の2005年展覧会図録の図像をもとに筆写した。
  - 35) ①から③までの翻刻が立命館大学国際平和ミュージアム編・発行『立命館平和研究』7号（2006年）、55-83頁に掲載されている。
  - 36) 同上、58頁、55頁。
  - 37) 前掲『証言・学徒勤労動員』、28頁。
  - 38) 直江（旧姓藤岡）千鶴子「十二月三日のこと」、前掲『自由学園二十三回生の記録』、112頁。
  - 39) 牛田守彦氏のご教示による（2023年3月3日）。
  - 40) 前掲『自由学園二十三回生の記録』、75頁（桜井八重子記）、88-89頁（羽田澄子記）。第一回女子特別技術講習会の記念写真が『証言・学徒勤労動員』口絵に収録、第二回講習会写真は『自由学園の歴史Ⅱ』220頁口絵に収録されている。両方に川田文子が写っている。
  - 41) 牛田守彦『戦時下の武蔵野Ⅰ 中島飛行機武蔵製作所への空襲を探る』、ぶんしん出版、2011年、16頁。武蔵製作所は終戦までに合計9回の爆撃を受けており、航空機工場に対する爆撃数では日本で最も多数回にわたりアメリカ軍の攻撃を受けた。
  - 42) 同上、41頁。自由学園女子部生徒1名（川田文子）、武蔵野女子学院高等学校5年生4名、都立第五商業学校生徒10名、山梨師範学校女子部本科1名が12月3日に死亡した。
  - 43) 直江千鶴子「十二月三日のこと」、前掲『自由学園二十三回生の記録』、113頁。
  - 44) 望月愛子「川田さん遭難から三日間の日記」、前掲『自由学園二十三回生の記録』、114-117頁。
  - 45) 毛利愛子「工場日記抄」、前掲『自由学園二十三回生の記録』、221頁。
  - 46) 父・川田久長から望月愛子宛の書簡（毛利愛子所蔵）が『自由学園二十三回生の記録』に収録されている。
  - 47) 羽仁もと子「物もある人もある時もある 必要なものはすべて与へられてゐる」、望月愛子「生活記録 娘より母への手紙 動員女子学徒の使命を思ひて」、羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 教育殉国」、『婦人之友』1944年12月号、2-9頁、32頁。
  - 48) 直江千鶴子「十二月三日のこと」、前掲『自由学園二十三回生の記録』、113頁。
  - 49) 2022年に学内で「川田文子さんのこと」を発表した後、お棺を校旗で包む情景を書き足したらどうかと山澤遥乃に助言する教師が複数あったようだが、彼女はそうしない意思を表明していた。
  - 50) 「女子部日番報告書（1945年11月）」には、殆どの学年（普通科1年～高等科3年）の当日の記述に学校行事として「追悼会」が記述されており、女子部全体の重要な行事として認識されていたことがうかがえる。
  - 51) 前掲『自由学園二十三回生の記録』、口絵写真。
  - 52) 前掲、早川喜久子氏へのインタビューによる（2023年3月10日）。
  - 53) 「尊い犠牲となった亡き友の思い出」、『学園新聞』14号（1952年5月30日）、2-3頁。「亡き友の思い出（その二）」、『学園新聞』15号（1952年6月30日）、2頁。当時の生徒日誌には羽仁吉一が講話の内容が断片的に残っている。たとえば、女子部高等科2年生徒は、吉一の講話の要約として「この戦争が正であったか邪であったかは難しい問題ですぐどちらとはいえない。しかしやがては歴史が解決してくれるであろう。又、この戦争で戦死した人のことを犬死のように云う人はいるが、決してそうではない。私達が独立を迎えこうして平和を迎えることが出来た陰に尊い犠牲があることを忘れてはならない。これから私達は独立心をもって又、神のお導きを信じて進んでいきたい。男子部十一人、女子部四人の戦死其他戦争犠牲者のこと」と記録している。
  - 54) 1955年当時、男子部卒業生の戦死者は10名が判明しており、2名が「未帰還」であった。のちに1名の戦死が判明した。
  - 55) 「男子部二十年記念同学会」『学園新聞』47号（1955年5月15日）、2頁。この時、羽仁もと子は体調の問題から会には直接参加していない。吉一も休養のため途中退席している。
  - 56) 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 男子部開学二十年」、『婦人之友』1955年6月号、142頁。
  - 57) 「戦没者記念碑の制作 男子部六年」、『学園新聞』221号（1971年11月25日）、3頁。「男子部卒業生戦没者記念碑建つ」、『学園新聞』229号（1972年8月25日）、2頁。
  - 58) 財団法人動員学徒援護会（1959年4月発足）は、1950年代の勤労動員学徒の遺族や傷害者の、軍人や軍属に準ずる国家保障を求める運動のなかで結成された「動員学徒犠牲者援護全国協議会」（1957年結成）を前身とする。動員学徒援護会は動員学徒および関係者の手記「あしあと」を出版（1960年）、戦没学徒記念「若人の広場」建設（設計：丹下健三）にも取り組んだ（山辺昌彦「空襲被災者の戦後」、『歴史評論』830号、2019年6月号、92-100頁）。しかし、もともと不便な立地で観光ルートから外れており、関係者の高齢化により来館者の減少が進み、1994年に閉園、翌年の阪神淡路大震災で建物が大きな被害を受け管理が困難になった。収蔵資料については、2004年に立命館大学国際平和ミュージアムに寄贈された（2023年8月、山辺昌彦氏にあらためて経緯についてメールでご教示いただいた）。なお、「若人の広場」は南あわじ市の管理となり、2015年3月に再開園している。
  - 59) 「若人の広場戦時品寄贈者名簿」（資料番号：43243）に、1968年7月19日付で川田良子（文子の母）の名前で寄贈記録がある旨、兼清順子氏にご教示を受けた（2023年5月10日）。川田文子の姪・早川喜久子氏によれば、文子の姉と妹は毎年のように「若人の広場」を訪問していたという。なお、遺品点数については、現在、立命館大学国際平和ミュージアムの収蔵品データベースでは16点となっており（『婦人之友』1944年12月号を含めると17点）、それに従った（2005年展覧会図録では、「遺影」は含まず15点としている）。
  - 60) 「若人の広場」のモニュメント付近に据えられたプレートには「この広場は 太平洋戦争（昭和十六年—二十年）で戦没した学徒ら若人を記念して 昭和四十二年に建設された（中略） 彼らは各々の持ち場で 生命が果てるまでひたむきであった それは肉身や民族を思うひたぶるな情熱と意志に ささえられていた 彼らは 人間として真実であることを懸命に欲していた（中略） この永遠の灯は 若くして死せるそ

の生命をいたむために またその生命が願ったものを道標として次の若い世代に伝えるために この広場で 永遠に燃えつづける 若人よ不純の劫火を消せ 若人よ不屈の理念を燃やせ 若人はここに巨歩を発するのだ」とあり、このプレートは2015年に「若人の広場公園」として再開園した後も掲げられている。

- 61) 兼清順子「ミュージアム収蔵資料紹介」、立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センター編・発行『立命館大学国際平和ミュージアム 資料研究報告』第6号、2023年6月、66頁。
- 62) 東京大空襲・戦災資料センターの常設展(2018年12月(2019年1月)～2020年3月)の「三多摩地域・島嶼部の空襲」を示す資料として、川田文子の遺影・葉書・生活記録(資料写真)が展示された。東京大空襲・戦災資料センター学芸員・比江島氏のご教示による(2023年9月26日)。
- 63) 「主な出品資料」、東京空襲を記録する会編『東京大空襲展：炎と恐怖の記録』、1972年。ただし、同冊子では展示資料の画像が全て紹介されているわけではなく、川田文子資料の写真は掲載されていない。
- 64) 板谷敏弘氏(1995年当時に江戸東京博物館の担当学芸員、現・東京都庭園美術館事業担当係長)のご教示による(2023年9月19日)。
- 65) 同上。
- 66) 「遺品、荒れゆくまま 淡路の戦没学徒施設、震災などで放置【大阪】」、『朝日新聞』、2003年8月15日朝刊。
- 67) 立命館大学国際平和ミュージアム編・発行『ぼくたちわたしたちの生きた証「若人の広場」旧蔵・戦没動員学徒遺品展図録』、2005年12月。立命館大学国際平和ミュージアム編・発行『立命館資料研究—立命館大学国際平和ミュージアム紀要』7号、2006年。『立命館大学国際平和ミュージアムだより』vol.1-13(2006年3月10日発行)。
- 68) 前掲、戦時下勤労働員少女の会編『記録—少女たちの勤労働員：女子学徒・挺身隊勤労働員の実態』(BOC出版部、1997年)は当事者による文集類を多く使用しているが、調査に使用された文集類75冊の発行年代をみると、1980-90年代が64冊で全体の約85%(戦後40～50年、当事者の年齢は50代から60代)を占めている。牛田守彦は、全国的に女子勤労働員の実態解明に関心が高まった時期として、1989年と1995年(1944年度の通年動員で高等女学校最上級生が還暦を迎えた年、高等女学校卒業50年の節目、「憲法改正」の声が高まったことへの危機感など)の重要性を指摘している(2023年9月20日の教示による)。
- 69) 保谷市戦争体験をつづる会は、「戦争体験を風化させてはいけない、何とか子供たちに伝えて行きたい」との思いから、1981年の保谷市公民館で開催された「文章講習会」を経て、自身の戦争体験を綴る活動を開始した。1981年9月に『なつくさ』創刊号を発行、10号(1990年)まで活動した(『なつくさ』1号あとがき及び10号座談会による)。
- 70) ただし、自由学園女子部卒業生会編『自由学園の歴史Ⅱ』(1991年)においては、直江千鶴子の「川田文子さんの殉職」の最後の一文が採用されていない。その理由は定かではないが、直江の回想が事実ベースの年表記述を補うために使われており、「主張」の部分が削除されたのかもしれない。
- 71) 武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会は、2001年8月末、

NTT(株)武蔵野開発センター内の旧中島飛行機武蔵製作所の建物および「地下道」の取り壊しに際して、その戦争遺跡としての歴史的価値に鑑み、記録保存・公開などを求めて武蔵野市などに陳情を行い、一定の成果を収めたことを活動の発端とする。ひろく武蔵野市周辺地域(武蔵野・三鷹・練馬・西東京・東久留米など)の戦争遺跡および戦争体験の記録・収集などを進め、戦争のない平和の世界を構築することを目指し、2002年1月27日に結成された(現会長は牛田守彦)。

- 72) 羽田澄子は、「もうこれ[[そしてAKIKOは……あるダンサーの肖像](演出：羽田澄子、2012年)]」で映画作りは最後にしようと思っていました。でも、安倍政権が出て来て、どうしても、もう一度、映画をつくらないといけないと思ったのです。それが学徒動員労働者です」と牛田氏に語ったことがあったという。牛田氏は「私の耳の底には、羽田さんの力強い言葉が残っています」と述べている(2023年9月22日メールでのご教示)。
- 73) 佐藤斗久枝氏への聞き取りによる(2023年12月2日)。
- 74) 野田清子「中島飛行機の思い出」、保谷市戦争体験をつづる会編『なつくさ』第9号、1989年、28頁。
- 75) コロナ禍の影響もあり、2020年以降は高齢の卒業生による学園訪問の機会は大きく減った。2022年10月に冊子『川田文子さんのことが完成した際、卒業生会が連絡先を把握している23回生(当時97歳)16名の方に郵送したものの、直接にお返事をいただけた方はなかった。
- 76) 前掲、兼清順子「ミュージアム収蔵資料紹介」、『立命館大学国際平和ミュージアム 資料研究報告』第6号、66頁。
- 77) 山澤遥乃は、自分たちの探求のきっかけや取り組み方について、エッセー『『川田文子さんのこと』について』を書いている(前掲書、25-34頁)。山澤遥乃が筆者に口頭で自分たちの制作経緯について話してくれた内容が非常に興味深かったので、何かの形でまとめておくことを勧めた。本人は自分たちの「方法」に最初から自覚的だったわけではなく「自然に」取り組んでいたため、筆者の提案により、あらためて自分たちの取り組みを振り返って書いたという。
- 78) 「川田文子さんと私たち～知るために・忘れないために～報告者：山澤遥乃・山澤綾乃(自由学園最高学部1年)」(メディア資料研究会第27回：平和博物館における戦争体験継承プロジェクト共催「戦争体験がない世代が伝える戦争の記憶2-自由学園の勤労働員学徒川田文子さんをめぐって」2023年3月3日オンライン開催報告)、『立命館大学国際平和ミュージアム 資料研究報告』第6号、2023年6月、54-66頁。
- 79) 山澤姉妹は2023年度卒業研究として「川田文子さんのこと」を土台にした平和学習教材の検討を行っており、筆者も学内外で「川田文子さんのこと」を題材にした授業やワークショップに取り組んでいる。これらの実践については稿をあらためて論じたい。